

千葉大学教育学部附属幼稚園「優秀園実践提案研究会」開催レポート

2021年2月20日（土）、2019年度「ソニー幼児教育支援プログラム」優秀園の千葉大学教育学部附属幼稚園主催による、「優秀園実践提案研究会」を開催しました。公立や私立の幼稚園・保育園・認定こども園、小学校、養成校の学生など、保育や学校教育関係者約160名（端末数）の参加がありました。

以下に千葉大学教育学部附属幼稚園による開催レポートを掲載します。

研究会概要

1. 日時：2021年2月20日（土） 9:30～11:30
2. 会場：千葉大学教育学部附属幼稚園
3. 主題：「科学する心を育てる」～子どもと共に作る保育の充実を目指して～
4. プログラム

1) 開会式		9:30～ 9:35
2) 実践発表		9:35～ 9:55
3) 園内研修動画	配信	9:55～10:20
4) 鼎談動画	配信	10:20～10:45
5) 記念講演		10:45～11:25
6) 閉会式		11:25～11:30

実践発表

主に2019年の論文の中から2事例について発表しました。

1つ目は、タンポポの綿毛を手にとった男児が、今にも風で綿毛が飛びそうだと予測し、実際に飛ぶ瞬間を教師と共に味わった事例でした。たまたま通りかかったのは担任ではない教師でしたが、その瞬間を丁寧にとらえ、子どもの思いに気づいたり、感動を共に味わったりしたことで、子どもが自分なりに予測したことが確信になっていく姿がありました。

この事例から見えてくる【「科学する心を育てる」環境と教師の援助のポイント】として、①子どもが予測したり、試したりしたいことに付き合う②温かいまなざしで見守る③感動を一緒に味わう、という点を上げました。

2つ目の事例では、チョウの幼虫を見つけその命が終わるまで心を寄せて関わりをもった子どもに焦点をあてた事例を紹介しました。

この事例では、体を動かすことが好きで虫取りを繰り返し楽しんでいたケンタが、幼虫を見つけて育てていく中で、どのように心が揺れ、関わりをもっていったかを丁寧に追っていきました。教師は育てている様子が見えるようにクラスに飼育ケースを設定し、他児も興味をもてるようにしていきました。また、必要に応じて子どもたちの思いを聞いたり、一緒に考える時間を設けたりし、共有できるようにしました。チョウが死んだ際、「まだ死んでいない」と訴えるケンタの思いから、クラスの仲間と考えていきます。虫に詳しい園長先生に聞いたり、自分たちで考えたりする中で、自分事として関わり、チョウの命と対峙したケンタの成長をとらえていきました。



宮里暁美氏 教職員による懇談動画 配信

鼎談動画

前述の園内研修動画を受けて、講師の宮里先生と本園職員とでオンラインの鼎談を行い、その様子を動画にまとめて配信を行いました。宮里先生からの質問に本園職員が答える形で鼎談は進み、2つの事例において園内研修の中で語られていた点について深めていきました。

まず園内研修の在り方について、子どもの姿を中心に語りつつ自分たちの援助についても語り合っていて、そこで様々な意見が大事にされていることがあげられました。そして1つ目の事例にあったように、1人の子どもを担当だけではなくいろいろな保育者が見ている（関わっている）という点が大切であり、担任ではないからこそその距離感でこの事例の男児と関わっていたことがよかったのではないかという話をいただきました。

2つ目の事例は、チョウの羽化から死までを子どもと一緒に見ていった事例でした。『変化』には羽化のように嬉しい変化だけでなく、死のような考え込まれる変化もある。だからこそ葛藤が起こり、子どもも保育者も向き合っていく。そして、その中でたくさん考え合っていたということが大切である、ということが語られました。そして、虫を『捕まえたくなる』という入口から（幼稚園でいえば）3年間をかけてゆっくりと育てていくものを見取っていくことが必要というお話をいただきました。

記念講演「驚くことから始まる保育」

宮里 暁美 氏/お茶の水女子大学 教授

「科学する心」を“驚く”に焦点を当てて考えてみたい。科学する心とは、子どもたちが主体となって生活や遊びを進める中で、心揺さぶられる何かに出会ったときの心、驚く心ではないかと考える。

レイチェル・カーソン著の『センス・オブ・ワンダー』では「子どもたちの世界はいつも生き生きとして、新鮮で美しく、驚きと感激に満ちあふれています。(略)子どもと一緒に再発見し、感動を分かち合ってくれる大人が、すくなくともひとり、そばにいる必要があります。」とある。論文に出てくる事例では、クラスの枠を越えて、その子に大人が立ちあっている。子どもが何かを感じ驚く時、対象をもっと知りたいと思うようになり、思いが深まり、探究へとつながっていくだろう。「科学する心」とは感じるということを中心において、驚く、感じるを重ねていく営みである。それは心の根っこの部分を耕すことである。

話題1「とぶよ、とぶよ」から。ワクワクする「驚き」のエッセンスが詰まっている。綿毛が飛んだ瞬間、リュウトと先生の驚き合う心が共通になった。大人というのはいろいろなことが予想できてしまうので、驚くという新鮮な気持ちを保つためにはカンファレンスが必要である。カンファレンスによって保育者の心に余裕が出て、やわらかく、新鮮な気持ちで驚くことができる心が保てるようになる。

話題2「子どもたちの姿から考えてみよう」。お茶の水女子大学こども園の事例からである。雷雨の様子を身を乗り出して見る1歳児。自然に対峙する乳児に保育者が共に感じる保育をしていた。羽化したチョウを逃がした途端、鳥に食べられてしまう様子を目の当たりにした4歳児。命は誰かの命につながっていることを知り、驚きを言葉にしたり考えたりしていた。子どもと一緒に暮らして寄り添うことが基盤である。

話題3「保育者のあり方を考えてみよう」。大人は経験を重ねると大抵のことが予想できてしまうので、新鮮な気持ちで驚くことは簡単なことではない。倉橋惣三は「うっかりしているとき」にその人の持ち味が出る、と述べている。うっかりというのは、教育という営みとは相反するもの、対極になるものとも捉えられ

るが、この二つがあってこそ、子どもと共有する根本の姿勢になる。

大人は経験にとらわれて、子どもの生き生きとした感性とずれてきてしまう。だが、そのずれを埋めるために重要なのは「対話する」という姿勢である。「対話」が分かれば道になる。

子どもも保育者も一人一人違う。だからこそ、多様な保育者が互いを認め合い刺激し合う関係性が大切である。自分たちの実践を自分たちで深めていく営み、これが今大切だと言われ、カリキュラムマネジメントとなる。一人一人の保育者が構築しそれらが重ね合って、園は出来上がっていくのだと思う。

最後に。2020年をなんとか切り抜けた私たち。だからこそわかったことがある。人と人が出会う生活。やさしさを重ね合う生活。身近な自然に目が向きありがたさを感じた。私たちには困難をチャンスに変える力がある。子どもたちが指し示す方向へと歩みを進めよう。

研究会後のご感想・ご質問について

Q：園内研修で本日の研究会で使われた動画を使用したい。研究会の再配信や、動画のレンタルなどは行う予定があるか。

A：申し訳ありませんが、個人情報や動画の保全のため、再配信や動画のレンタルなどは行っておりません。また研究会にてご一緒できる日を楽しみにしております。

このほか、多くの皆さまよりご感想や励ましの言葉を頂きました。ありがとうございました。